

平成26年度 第3回 企画展

## 中世の常滑焼（2）

平成26年度第3回目の企画展は、中世の常滑焼（2）と題して、とこなめ陶の森 資料館・陶芸研究所の合同でおこないます。

常滑焼がはじまった「中世」という時代は、平治政権の成立から鎌倉時代及び室町時代を挟んで、戦国時代までとしています。つまり、天皇家と貴族を中心とする中央集権から武士の台頭によって、世の中が大きく変動する時代です。

知多半島に多数築かれた常滑焼の窯は、平安時代末期のおよそ900年前から始まり、瀬戸窯や渥美窯などの中世窯業地と比較しても窯数が多いです。特に、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて、北は東北地方の奥州平泉、南は九州の大宰府に至るまで大量の甕や壺が供給されています。

文治5年（1189）、源頼朝によって平泉の奥州藤原氏が滅ぼされると、幕府のおかれた鎌倉が常滑焼の最も供給される都市に変わります。

平治政権から鎌倉幕府、そして北条氏へと時の権力者が次々と変わっていく中で、中世常滑窯で焼かれた製品も変化していきます。平安時代末期には、大きな甕や三筋壺とともに日常雑器である山茶碗や小皿が焼かれています。しかし、鎌倉時代になると三筋壺の生産が極端に減少し、元寇が起きた鎌倉時代中期には山茶碗も生産を終えます。窯も現在の常滑駅周辺に集中するようになり、近世常滑窯の壺や甕といった大型貯蔵容器を専焼する生産体制を確立していきます。

さて、前回の展示では知多半島で窯が築かれ、甕や壺の生産が始まる常滑焼の胎動をテーマにしました。今回は、知多半島で焼かれた常滑焼の中でも、自然釉の美しい甕（かめ）や三筋壺（さんきんこ）、焼成の途中に何らかの事故が起きたことで、偶然が生み出した焼き物も展示をしています。

また、常滑焼の中でも絶え間なく生産が続けられた甕の口の形に注目した展示をおこないました。平安時代末期に焼かれた甕は口縁が大きく開くように作られています。鎌倉時代中期になると、断面がNの形に似た帯状の口縁形態へと変化し、その変化は室町時代にも引き継がれていきます。こうした変化の流れは、当時の流行だけではなく、甕を焼く窯構造の変化や、製品の窯詰方法の変化など様々な要因が指摘されています。

とこなめ陶の森 資料館